

震災を経験して子どもたちに たくましさが生まれた

東川口保育園は、園児数104名、職員数18名の町立保育園。今回の地震で最大震度を観測した川口町の3つの保育園の中で、もっとも園児数の多い園です。

数km離れた田麦山地区には分園があり、建物が全壊状態になる被害を受けたため、地震発生後から、職員は本園と行動を共にし、保育再開後は東川口保育園に保育の場を移しました。4月から分園は閉鎖され、職員と園児は引き続き東川口保育園で生活しています。両園の保育者の方々から地震当時の状況や子どもたちへの影響などについて、お話をうかがいました。

保育者同士の連絡もとれなかった震災直後

「地震発生の10月23日は土曜日で、夕方ということもあり、子どもたちはすべて家庭での被災となりました。園の中の人の被害が出なかったのが不幸中の幸いでした」と話す星野園長。被災直後は、道路が寸断されたり、電話も通じない状態でした。各保育者とも連絡がとれず、園の機能はまったくストップしてしまっただけです。駆けつけた園長は炊き出しをはじめ、災害本部の仕事に駆け回りながら情報を集め、やっと保育者たちと緊急召集をかけることができたのは、10月26日の夜でした。「園舎の壁はあちらこちらがひび割れていて、保育室や職員室では机やロッカー、棚も倒れ、中に入っているものもすべてが散乱し、足の踏み場もない状態でした。ガスや水道、電気などすべてのライフラインや園舎の修繕を行うことよりも、23日の深夜から、園児たちの安全確認を行うことが最優先だったの

で、子どもたちや家族が全員無事だったことを確認したときは、ほんとうにほっとしたものです」（星野園長）

当初は避難所に保育者が訪ねる「出前保育」で、自由帳を持参してお絵かきをしたり、簡単なあそびをしたり、子どもへの不安のチェックや対応をまとめた「心のケアブック」を作成・配布して、避難所での園児のストレスを発散できるように努めました。これによって、「通常保育に戻ったとき、園児と担任の関係をスムーズに取り戻すことができました」と星野園長。

余震が起きたときは、すぐに保育者のもとに子どもたちを集めることに

11月22日に園での保育が再開した際、保育者の方々は、とにかく笑顔で子どもたちを迎えようと思っていたそうです。

「子どもたちも、園に来てみんなに会えることがよほどうれしかったでしょう。いつもけんかばかりしていた子どももどしどし『会いたかったよ』と抱き合っているようすを見ていたら、こちらにも涙が出てきました」（小西先生）

被災後の子どもたちには、暗いところを怖がったり、赤ちゃん返りが見られたり、なにかあるとすぐに泣き出してしまったりといったようが見られたそうです。園でも、お昼寝のときに修繕の工場の音がしていると、泣き出してしまったりもいました。そのため「子どもが保護者と離れることを不安に思わないよう、朝の登園時は、ゆつくりと時間をかけて子どもと別れるように、保護者にも協力してもらいました」と小西先生。

今回の地震は余震活動も頻繁だったので、保育中に揺れを感じたら、すぐに子どもたちが保育者のところ集まるようにし

地震発生から 保育園活動再開まで

地震が起ってから、園がほぼ落ち着きを取り戻すまでの約1か月を、「園の動き」と「問題点」という視点でまとめました。

地震発生時〜1週間 10月23〜29日

23日 午後5時56分地震発生

●園の主な動き

- 園児の安全確認。
- すべてのライフラインが機能停止。
- 26日 災害対策本部の掲示板上に休園のお知らせを載せる。
- 27日 園舎内外に入れるようになる。
- 避難所としての準備開始。
- 28日 各避難所へ子どもの状況把握開始。出前保育開始。

●課題、問題など

- 東川口保育園は半壊、田麦山分園が全壊状態に。
- 道路が遮断されてしまい、職員が保育園に來れない。
- 電話やFAXが使用できないため、情報が入らない。
- 災害対策本部全体の情報が入ってこない。
- 自宅にいる人が少なく、在園児の状況確認に時間がかかる。

2週目 10月30日〜11月5日

●園の主な動き

- 11月3日「心のケアブック」作成。
- 4日 緊急一時保育に向けて、園舎内の仮修繕開始。

●課題、問題など

- 避難所生活の長期化や避難所不足。
- 園児の心のケアが必要に。
- 安全確保のために園の再開が延びて、出前保育のみになってしまっ

て、人数の確認や避難ができるようにしました。

「子どもたちの命を守ることが最優先だと実感しました」

(小西先生)

子どもたちには震災を乗り越えて
たくましく成長する力がある

大地震は、園児にも保育者にも、生活面で計り知れないほどの打撃を与えました。長期にわたる避難所や車中での生活。食料やトイレなどの問題は、自衛隊や全国の方々からの支援でもなく解決しましたが、地震直後は下着や靴下、ジャージさえ不足して、救援物資がとてもありがたく感じられたそうです。

しかし、震災が子どもたちに与えたのは、マイナス面ばかりではないようです。



地震後半年を経た東川口保育園。今日は4～5歳児のとってきたヨモギで、団子作り。「いただきます!」の元気な声が園中に響く。

東川口保育園には物資だけでなく、全国の園からメッセージや千羽鶴なども送られてきている。



被災後の子どもの気になる行動

東川口、西川口、田麦山分園の3園(園児134名)の保護者への調査から、11月26日時点での集計結果を出しています。

<項目>	<人>
周りにだれかがいないと不安になる	58
泣くことが多くなった	38
ハイテンションな行動が多い	37
赤ちゃん返りがある	31
必要以上におびえたり、敏感になる	18
突然不安になったり、興奮する	12
頭痛、腹痛、息苦しさ、吐き気、めまい、頻尿、おねしょなどの体の症状がある	16
落ち着きがなくなったり、集中力がなくなる	11
眠らない	6
繰り返し悪夢を見る	5
その他	22

これまでに体験したことのない大きな地震のショックからか、被災後1か月はひとりになることを怖がったり、泣いたり、興奮したりする子が多く見られた。現在は数は少なくなったが、おんぶやだっこの要求が多かったり、ちょっと注意しただけで泣くといったようすが時折見られる。

地震から半年以上が経過した今も、いまだに仮設住宅住まいの園児もいて、完全にもとの生活に戻るには、もう少し時間がかかりそうです。それでも、園舎に響き渡る元気な声からは、震災を乗り越えた園児たちのエネルギーがあふれているように感じられました。

「他人とのかかわりが凝縮された避難所や仮設住宅での生活は、ストレスもありますが、ほかの園児や小1高校生など、いろいろな年齢の子とあそぶ姿が見受けられました。そんな人とかかわりが、子どもたちを成長させるきっかけにもなったようです。また、内弁慶でおとなしかった子が、自分からあいさつできるようになったり、活発になって自分を出せるようになるなど、どんな状況の中でも、子どもには確実に成長していく強さがあることを実感しました」(小西先生)

取材時は、園の周りでも、壊れた家屋の取り壊しや建設工事があちらこちらで行われていました。

「工事の車などが行き来して危ないので、どうしても室内あそびが多くなってしまう。だから、今日はこれから保育者が周囲を歩いて、安全なお散歩コースを確認しに行くんです」と星野園長。

3週目 11月6～12日

●園の主な動き

7日「心のケアブック」を出前保育で配布。

8日 上下水道が修繕不能のため、安全、衛生面により、この日から予定していた緊急一時保育開始を延期。

●課題、問題など

・出前保育に行く際の道路状況が悪く、危険を伴う。

4週目 11月13～19日

●園の主な動き

17日 園を避難所していた住民の一部が、隣接の生涯学習センターに移動。園の1階の未満児室のみが避難所になる。上下水道の修繕が進む。

●課題、問題など

・避難所生活のストレスが大きくなってくる。

・食事のバランス。

5週目以降 11月20日～

●園の主な動き

11月22日、一時保育開始。1階は主に避難所として、保育は2階で行う。余震が続くため、昼寝を遊戯室で全員いっしょにする。

12月1日、通常保育開始。食事はお弁当と水筒を持参。ガスの修繕が進む。

6日、給食開始。

13日、送迎バス開始。

●課題、問題など

・本来の保育業務に一步步近づくが、修繕が進まない。
・避難所併設のため、乳児保育開始延期。